

そよかぜだより

第85号

発行 2009. 6. 21

毎月1回発行
社会福祉法人
そよかぜ

連絡先

ひばり園 578-0855
FAX 578-0466
くれよん 578-2575
つくしの家 578-0855
あおぞら 570-6110
エール 570-1233

資源回収時のご連絡は
「ひばり園」へ

また福祉制度の悪用事件、聴覚障害を偽装 聞こえないことにして障害年金を不正受給

前回のそよかぜだよりで、障害者郵便制度の不正利用事件についてお知らせしましたが、残念ながら今回また、別の福祉制度の悪用事件についてお知らせします。

札幌市で開業している耳鼻科の前田医師は、仲介役の男が連れてきた人たちについて、耳が聞こえているのを知りながら、全く聞こえないという重い障害をもっているように虚偽の診断書をつくりました。その診断書を使って香田社会保険労務士は、申請者が障害基礎年金がもらえるように社会保険庁に申請する際、申請手続きを代行し、多額の障害年金を不正に受給させました。不正受給したのは137人で総額は3億7千万円に上ります。

前田医師は診断に際して、耳がどの程度聞こえるかを検査する装置に患者(?)を座らせ、まったく聞こえない人と同程度の結果が出るように反応の仕方を指示して、指示どおりの結果が得られるまで練習までしていたそうです。そのようにして出た結果に基づいて、この人は耳がまったく聞こえないという診断書を作成しました。障害年金を受給するには、その人が重い障害者であることを証明する医師の診断書が必要です。

香田社労士は、前田医師の診断が実際の症状と違うことを承知しながら、社会保険庁に申請する申立て書に虚偽の内容を記入しました。「前田医師の診断書の中身と申請者の症状が食い違う場

合は申立て書のアレンジした。」「そういう風にするこ
とで年金が取りやすくなる」と言っているそうです。さらに申請書を書く際に、まったく聞こえないはずの当人と電話で詳しく相談して書いたそうですからまるで笑い話のようです。

このような二人の努力(?)で障害のない人が障害年金をもらえるようになると、前田医師はその人に毎月一回以上診察にくるように指示し、どこにも病気がない人を診察したことにして診療報酬を稼ぎました。香田社労士は年金振込みがあるたびにその一部を謝礼として受け取っていました。社労士と障害のない普通の人たちで3億7千万円を山分けしていました。前田医師は「本人たちが聞こえない振りをしたのであって、自分の診断は正しい」と今でもいっているそうです。

し烈な競争を戦う一般経済界から見ると、福祉の世界はまだ甘い汁が多いのかもしれない。それをめざしてハゲタカが襲いかかってきます。障害者を守る福祉制度は他にもたくさんあるので、当局のきびしい管理と取締りをぜひお願いしたいと思います。

ご協力ありがとうございました。 5月の募金 30,386円
(順不同) 平成21年4月～5月の合計 70,211円

島田 博司	様	細谷 栄子	様	井上 誠一	様
帯刀 進	様	エイ・アイ	様	臼井 信行	様
とまと美容室	様	大野 元雄	様	臼井 道代	様
山下 暉枝	様	宇津木 牧夫	様	田中 明子	様
北野 浩美	様	森田 勝	様	川崎 利男	様
大内 たま子	様	濱野 岬	様	平岡 知子	様
清水 賢	様	国本 昭治	様	大野 素子	様
清水 知子	様	田村 由親子	様	本間 正彦	様
袴田 実	様	田村 千佳	様	阿部 郁子	様
榎本 正代	様	清水 キヨ子	様	長谷川 キヌ子	様
松岡 竹子	様	尾又 恭子	様	角野 克子	様
角野 満壽子	様	土屋 三枝子	様	村野 理子	様
天満 喜代子	様	下田 コウ	様	山影 幸子	様
小沢 達子	様	渡辺 四郎	様	平野 嘉子	様
永岡 智恵子	様	吉野 満里子	様	関村 理	様
橋本 亜紀子	様	ア-サロンカワノ	様	関村 英希	様
田中 稔	様	ア-バンデックス	様	桜沢 喜作	様

匿名様(4,005円)

ご連絡は、ひばり園へ
羽村市五ノ神2-6-7
042-578-0855

くれよん5月の売上げ
883,900円でした。

羽村市内の小学校と中学校の生徒のみなさんが、各学校単位でプルトップ収集にご協力して下さっています。ありがとうございます。

社会福祉法人 そよかぜの

《資源回収》に

ご協力をお願いします
新聞、雑誌、ダンボール

(ボロは扱っていません)

5月は23,920tでした。金額は359,782円となりました。この収益は、社会福祉法人そよかぜの運営資金になります。みなさまのご協力ありがとうございました。

7月は第3日曜日19日です。

大雨の場合は、次週の日曜日に順延します。

長い付き合いでも、わからないことばかり

障害ある人の奇妙な行動

理解できなくても危険視する必要はありません

障害のある人の中には、私たちが理解できないような奇妙な行動をする人がいます。

毎日ひばり園に通ってくるとき、荷物がいっぱい詰まっ
てパンパンにふくらんだ大きなリュックやバッグを持ってくる人がいます。まるでこれから山登りか旅行にでも出かけるようです。狭いロッカーに力を入れて押し込んで、帰りにはそれを引っ張り出して持って帰ります。

バッグの中には何が入っているのだろうかと思いますが、人のバッグを勝手に開けるのはプライバシーを侵すことになるので詳しく見たことはありません。ただ、ひばり園での作業に必要なものではないことは確かです。作業のために必要な道具類はすべて園内にそろって個人が持つてくる必要はありません。それが証拠に、何も持たずに手ぶらでくる人もいますがそれで十分作業はできます。

おそらく、これとこれは必ず持って行こうと自分なりに考えて、それらを全部リュックに入れるとあのように膨らんでしまうのでしょうか。それほど大事なもののなら、園内では使わないのだから家のタンクにでもしまっておけばよいのと普通なら思いますが、当人にとっては肌身離さぬようにしていなければ安心できないのでしょうか。

障害のある人が、特定の物に強いこだわりや執着心を持つことはよくあることです。

子供っぽい縫いぐるみを片時もはなさず持ち歩く人もいます。また、しばらくグループホームにいた人ですが、子供の時から寝るときに使っていたタオルケットを、それが無ければ眠れないといまでも使っている人がいました。ポロポロになっていて不潔だからと注意しても決して手放しませんでした。

このほか、自閉症の人が、

同じ言葉や動作を何回も繰り返したり、無意味に手のひらをひらひらさせたり、急に大声を出したりすることは、自閉症特有の行動としてよく知られています。

このように知能や精神に障害のある人が、私たちが理解できないような奇妙な行動をすることはよくあることです。が、長年その人たちと付き合いっていると慣れてくるので、いまさら奇妙だとか不思議だとか思わず当たり前になっていきます。したがって、特別周りに迷惑にでもならない限りはその行動を制止しないで、本人の気がすむようにしていきます。無理に制止するのは生来の障害そのものを押さえることになるので、本人の精神状態が不安定になり、ときにはパニックになることもあるからです。

周りが気にしなければ奇妙な行動があっても業務に支障が生じることはないので問題はないのですが、ただひとつ心配になるのは、私たちは慣れているからよいとしても、障害のある人と接したくない一般の人がその行動を目

にした時どう思うかという点です。変な人、気持ちが悪いや人と思って障害者を遠ざける原因にならないければよいかと心配されるのです。

もう十五年ほど前のことで

すが群馬県で精神科病院を経営している石川先生にお話をうかがったことがあります。

先生は精神障害者の地域生活を目指して、町の中に病院経営のグループホームをつくりました。そのホームの利用者の中に蟻（アリ）の動きを見るのが好きな人がいました。

ひまさえあればホームの庭に

しゃがみ込んで蟻を見ていま

す。休みの日などは一日中庭

にしゃがみ込んでいました。

それを見て近所の人が「気味

が悪い」といい始めました。

そのうち「あのような人は、

気が変わると突発的に何をす

るか分からない危険な人だ」と

言い出す人がいて、他の人も

同調してグループホームの

排斥運動が起こりました。そ

の運動を抑えるために石川先

生は大変な苦勞を強いられました。

その人はただ蟻が好きなか

けでもなくホームの庭で見ているだけです。おとなしい人で他人に迷惑をかけるようなことはできない人でした。それでも「気味が悪い」の一言で排斥運動になるのです。

それ以来、人々の心の中に根

強くうずまいて「障害者への偏見」と戦うことが石川

先生のライフワークになりました。

昔の話になりますが、第二

次世界大戦の頃、ドイツのナ

チス政権が、当時の画壇に

華々しく登場したピカソ、ゴ

ッホ、クレールなどの作品を退

廃的という理由で廃棄処分にし

ました。この人たちは後に

二十世紀を代表する大芸術家

と賞賛される人たちです。し

かしナチス政権にはその芸術

的価値が理解できなかったの

です。人はだれでも自分が理

解できないものに、わけの分

らないものに初めて出会うと

警戒して危険視する傾向があ

ります。

障害ある人の奇妙で不思議

な行動を見て、それを危険視

する人はナチスと同じだと決

メ付けるつもりはありません。それというのも、もしいまピカソの本物があれば一枚で数十億円の価値があります。ナチスにかぎらず当時初めてピカソを見た人は、なにやら奇妙で分けのわからない絵だとして、その価値を正しく理解できた人はごく少数だったのではないのでしょうか。

いきなり理解してくれというのはどだい無理な話だと思います。私自身、息子のことを含めると障害者との付き合いは四十年になります。そのあいだ実に多くの障害ある人と接してきましたが、いまだにわからないことばかりです。福祉にかかわる者は社会に向かって「福祉への理解を、障害者への理解を」と訴えるものですが、そう言っているお前はどれだけ彼らのことが分かっているのかと聞かれると返答に窮します。

ただ彼らのそばにいる時は安心で気楽で、普通の人のそばにいない方が身構えてしまします。「理解」という言葉が大上段に構えたと人は遠ざかるでしょう。彼らほど安全な人はいないので気楽にそばにきてください、とみなさまにお願いしたいのです。